

われわれ現生人類があと何年くらい知的生命体として存在し続けることができるのか、千年か1万年か1億年か十億年か。

電波望遠鏡による地球外の知的生命探索は半世紀以上続けられてきた。しかし、少なくとも太陽系から200光年の範囲の2000の星（惑星系）に関する限り、文明が発しているらしき電波は検出されなかった。地球文明は隣人のいない孤独な文明らしい。

これは何を意味するのだろうか。知的生命は何億の星（惑星系）に一つくらいの非常に奇跡的な存在なのかもしれない（それでも天の川銀河だけでも1000億ほどの星があるというから相当数の知的生命があることになるが）。

しかし、科学は奇跡よりもまず一般則を考える。そうすると、もうひとつの可能性は、宇宙に文明はありふれているがその寿命は短い、ということだろう。地球の例では、生命はわりと簡単に発生する。46億年前に地球が生まれ、だんだん冷えて40億年前に液体の水（海）ができると（地球史の時間スケールで）ほとんど間髪いれずに始原生命が誕生している（注1）。その後、長い時間をかけて始原生命が進化して文明を持つ知的生命が出現した。その間に海が干上がることなく存続していたなど、生命の生存と進化に必要なさまざまな好条件がそろっていたのは幸運なことに思える。しかし、こういう幸運は別に奇跡ではないだろう。太陽とよく似た生成と進化を歩む星は珍しくない（注2）。同じような進化をしている星なら、同じような惑星系を持つことになり、その中には地球と同じように生命が生存可能な条件が長続きしている惑星があるだろう。そうすると相当数の星（惑星系）で文明が生じるだろう。ではなぜ文明の電波は発見できないだろうか。もし、電波を利用するところまで発達した文明は長いあいだ持続することはできない、とすればどうだろう。そういった（宇宙史の時間スケールで）ほとんど瞬間的に消え去る文明にたまたま同時期に遭遇するチャンスはごくまれとなるだろう。

だとすれば、文明はなぜ短命なのか。どの星の惑星でも文明というものは意外に脆弱で、何十万年に一度起きる程度の天変地異や疫病などで簡単に壊滅するということなのか、あるいは（個体の生命の内には死に向かう要素が潜んでおり最後には必ず死が実現するように）文明そのものの中に破滅が胚胎していて文明の発展とともに成長しつづれ自分自身を破壊するのか。たとえば文明内部の殺し合い（戦争）の技術がとめどもなく発展し（注3）、制御不能となり文明が減じるのか。

人間個人の寿命はせいぜい100年ちょっと。われわれは孫の世代の100年後のために行動する（たとえば地球の温暖化の問題）くらいが真剣に考える時間スケールの限界であって、ほんの短い時間の間の最適解を考えるだけである。10万年後の人類のことを考えて行動規範とする（たとえば地下資源などは将来もっと有効な利用法が開発されるのは疑いないから現在は採掘しないで未来のために保全しておくとか）ということはない。そもそもそこまで責任を感じる・・・想像もできない遠い未来のために今犠牲を払う・・・必要があるのかと問うこともできる。こういうことを考えていると自分でもこれは真面目な話題ではなくてSF的な冗談のように思えてくるが、冗談と思ってなにも考えないことこそすでに（今生きているヒトの個人にとっては遙か先の、宇宙史からみれば直近の）未来の文明崩壊を用意するものかもしれない。

#### 注記

1. 金星は誕生後20億年間、海があったかもしれないという。火星に海があったのはほぼ確かのように、その海は長く（30億年？）存在していたらしい。すると、原始的な生命が誕生していた可能性がある。今はたぶん生きていないだろうが、痕跡でも発見されることを期待している。比較によって地球生命の特殊性と普遍性の理解が始まる。



2. 太陽のような星は、星全体の1割程度存在する。銀河系では100億の星が、電波望遠鏡で調べた2000の星のうち200程度が太陽型の星である。また、星全体の7割くらいは太陽よりも小さい暗い星であるがやはり惑星が発見されている。こういう星は寿命が100億年とか長いので、もし文明が生じて滅びないでいたら超高度なレベルに達しているかもしれない。

3. 昔は女性が大の男を殺傷することなどほとんど不可能だった。しかし、今なら銃があれば簡単にそれができる。機銃があればあっという間に多数の人間を殺傷できる。銃を手に入れなくても、フランスで起きたように車を人ごみに突っ込むだけでも同じことができる。地下鉄サリン事件のように、組織された集団ならさらに高度な技術（毒ガスの製造）を使う。現在その最たるものは、核兵器だろう。核戦争による人類の大量自滅寸前の危機はすでに経験済みである（キューバ危機）。将来、もし少数の（極端な場合、一人の）人間によって全人類を滅亡させることができるような技術が開発されれば、文明はそこで終わるだろう。不可解な動機によって、無関係の多数を（全人類を）道連れに死に向かおう、という者（集団）がきっと現れるから（米国でしょっちゅう起きている銃の乱射による無差別大量殺戮、303人の子供を道連れに918人が「革命的自殺」をした1978年の人民寺院事件、など）。